■森下　徹（大阪市立大学大学院）

最近は活動に参加できておらず、申し訳なく思っています。しかし、初期～中期の活動に参加できたことは、自らの「研究姿勢」「問題意識」「人的ネットワーク」にとって、大きなプラスとなった。問題は、それをいかに自らの研究（≒論文、叙述、方法、理論）に生かせるか、自らの活動（史料保存運動やアルバイトでの史料整理、自治体史編さん、尼崎聞き取り研究会etc）に生かせるかである。そこでつめて考えたいことは「戦後資料保存運動の負の遺産」（大国報告）だけでなく、「正の遺産」はどこにあったのか、両者の関係はどのようなものだったのかにある。また「研究者」と「生活者・市民」との意識のズレは問題だが、その一方で多少「ズレ」があって当然とも思える。その「緊張関係」を考えてみたい。

日本史研究会大会でこうした「特設部会」が設けられたことは、一つの画期的なことと後々評価されるであろう。果たして参加者は「多かった」のか「少なかった」のか、今は分からない。塚田孝氏、山本幸俊氏、鈴木良氏の発言は、重要な指摘だと思った。つまり「正の遺産」をどう評価するのか、また、研究＝学問的成果によって、勝負できるか。やや「負の遺産」「ギャップ」にのみ、関心が集中してしまったのかもしれないと思う（これまでのネット及び自らの考えが...）。

■山本幸俊（新潟県立文書館）

ここ一年余りの史料ネットの活動の中から発言されてくる言葉や文章に、多くを学ばせてもらいました。とりわけ指摘されるように、歴史学の在り方が、これほど実感的に問い直されていることは思いもよらず、何より時機を得ています。歴史学界全体の共有認識に広がって欲しい限りです。歴史研究者は「史料を大事」という気持ちをみんな持っていますが、一般論から多くの方は出ていないように思います。震災以外にも、史料保存の現状は全国的に厳しいものがあります。歴史研究者は、自分の研究テーマとは別でも、史料保存活動に一般論から一歩踏み出すべきで、その行動が「状況」を変えられることを、ネットの活動が示してくれました。歴史研究者みんなが具体的に（市民とともに）動き出せば、市民が変わり、市民が変われば行政が変わります。ネットもこれまで市民講座など市民との関わりを重視してきましたが、今回のように歴史研究者への呼びかけや議論の場を設定していくようにしたらと思います。歴史研究者の共有認識は、思ったより広がっていないのではないでしょうか。

議論の場が設けられ、議論する方向性も見え始めた入り口にさしかかったと思います。話すべき問題が大きく、本質的なこと故、多くの時間と段階が必要なように思いました。司会者が整理されて出された問題に近づくためにも、今後とも継続した討論の場をもっていただきたいと強く感じました。討論の中で出てくる色々な意見を整理し、方向を示していただけることを今後とも期待します。

■匿名希望

地域住民との感覚のズレは本当に埋まるのか？ 例えば、古文書を読む会などは、資料群によっては特異性だけが強調されすぎないか。在野のアーキビストを単なる郷土史家にしてしまう可能性を秘めてはいないか。

関西という地域の特異性はないか？ 同一の方向性で全国的な活動としての展開が可能であるのか？　例えば、文化財や資(史)料は京都や関西、江戸や地方の城下町のもので、そうでない村でしかなかった所にはそういったものはないという意識があるのでは。

史料ネットが撤退した後でも在野で活動は継続されるのか？ 郷土史家的人物によって引きずられてゆくことはないのか。

史料保存問題の難しさをあらためて実感。地域と資(史)料は本当につながっていくのか。利用と保存の間、意識はどうなのか。利用と保存をどう共存させていくのか。専門職、研究者とのつながりを持たない行政とのからみは。

■匿名希望

史料ネットあるいは歴史学に関わる人と「行政」との関係について、両者を対立させる発想からは、何の建設的関係も生まれないと思います。歴史認識のギャップを埋める対象は、市民だけでなくそれを包摂する行政も含まれるものと思います。それは、自力のある組織、組織内に強力な影響力がある史料保存あるいは編さん組織は、はっきりいって数えた方が早い、あるいは皆無に等しいという現実にかんがみて言えることです。この悲しい現状を踏まえた上での行動が、今こそ求められているといえないでしょう